

「主体的・対話的で深い学び」に向けた世界史授業の実践

多々良 穰

はじめに

アクティブラーニング（以下AL）という語が世間に広まって久しい。ALが初等中等教育の現場で強く意識されるようになったのは、二〇一四年に中教審に「初等中等教育における教育課程の基準の在り方について（諮問）」⁽¹⁾が提出されてからである。これにより、「課題の発見と解決に向けて主体的・共働的に学ぶ学習」や「主体的に取り組もうとする意欲」、「リーダーシップやコミュニケーション能力」を育てるといった授業改善が提起された。その後「論点整理」（二〇一五年）、「審議のまとめ」（二〇一六年八月）、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（二〇一六年十二月）⁽²⁾をへて、二〇一七年度末に新たな「高等学校学習指導要領」が公表された。

本稿では、文部科学省がめざす「主体的・対話的で深い学

び」を実践している筆者に大きな影響を与えた四人の教員の話を簡単に紹介し、筆者の授業の目的と振り返りの意味、そして得られたものを考え、今後の課題にも言及したい。

一 四人の手法や考え方

（一）KP法（紙芝居プレゼンテーション法）——皆川雅樹氏⁽³⁾

KP法は、伝えたい内容を数行ほどマジックで用紙に書き、黒板にマグネットで貼りつけて説明する手法である。板書のかわりにKP法で説明して問題を解くかたちになると、生徒が板書をノートする時間が省かれ、考える時間が確実に増える。KPシートは黒板に貼ったままであるため、説明後もその流れを確認できる。それに対してPowerPointなどのプレゼンテーションソフトは、スライドを一枚一枚映すため、KP法の方が、内容を理解しやすい長所がある。⁽⁴⁾KP法を初めて知ったのは皆川氏の講演であったが、授業の終わりに生徒がリフレクション

カードを書いてメタ認知する（客観的に自分の学習活動を見直し、次回の授業に活かす）こと、そして教員自身が生徒による感想や意見を読んで授業改善する重要性も、彼から学んだ。

（二）教員の意識を変える——下町壽男氏⁽⁵⁾

「主体的・対話的で深い学びを目指して」アクティブラーニングが果たすべき役割は何か」と題した下町壽男氏の講演は、ALの根本的理論を追求するものであった。「哲学」とも表現できる内容で、どのような視点からALをすべきかを考えさせられた。下町氏によれば、教員は授業においてさまざまなことを実践すべきだと考えがちである。だが教員が授業で手を加えて過剰に働きかけると、生徒が学ぼうとする気持ちを削いでしまうこともある。教えるということは、知識を生徒に与えるのではなく、生徒が自分自身で理解するよう導くことである。公式や用語をただ答えさせたり、必要以上に説明したりすることをやめる「引き算」を考えるべきである。つまり、教員が教授パラダイムから学習パラダイムへ意識を変えていかなければならない。この講演を聴いてから、教えるのではなく導くように心がけ、生徒主体の授業が何かを強く意識するようになった。

（三）グループワーク——小林昭文氏⁽⁶⁾

AL実践セミナーにおいて、参加した教員が物理の問題を解くグループワークを体験した。物理についての解説の時間は一

〇分間ほどで終え、あとは実際に問題を自分自身で解き、わからない人がいればグループ内で教え合って全員で正解を共有する。その後、一度解いたプリントと同じ問題を「確認テスト」で再度解くので、全員が一〇〇点をとれるように設定されている。このような授業は、間違えてもいずれ理解できるという「安心と安全」を与える場となる。グループワークをすると、勉強をせずに雑談になってしまいう場面が想像できるが、カウンセリングを勉強してきた小林氏ならではの声かけが絶妙である。残り時間を知らせたり、グループ内で協力できているかを声かけしたりするだけで、生徒の質問に教員が答えるのではなく、生徒同士が教え合うように進めていく。無気力な生徒に対しては、根気強く待ったり働きかけたりすることが重要で、「やりなさい」や「静かにしなさい」という言葉は、生徒が自主的に勉強しようという気持ちを削ぐことになるので絶対禁物である。このセミナーに参加して以降、実際自分が担当する授業で、徐々に生徒への声かけの方法やタイミングが変わり、生徒が自主的に勉強するまで忍耐強く待てるようになった。

（四）問いの設定——石川一郎氏⁽⁸⁾

二一世紀の教育について考える自主勉強グループで、石川氏を招いての勉強会が開かれた。この勉強会では、石川氏による解説はほとんどなく、参加者が自分たちで生徒同様に考え、努

力して解答を出すように設定されていた。

数枚の絵を題材に、「絵に描かれた状況を簡単に説明し、それについてあなたが思ったことを述べよ」という問題が出され、複数の人で対話しながら解答を導いた。正解は存在せず、それを導き出す過程が重要である。この活動において大切なのは、①状況を的確に説明し、②考えたり感じたりしたことを出し合い、③その理由を明確にすること、であった。また、首都圏模試センターで採用されている「思考コード」の紹介があった(図1)。⁹⁾「思考コード」は、A…基礎問題を中心とした一問一答形式に知識で答えられるか、B…知識を使って論理的に説明できるか、C…答えのない問いに創造的な思考を用いて説明できるか、という三つの項目があり、それぞれ難易度が1から3まである。たとえば、「もしあなたがザビエルだとしたら、布教のために何をしますか。具体的な根拠とともに四〇〇字以内で説明しなさい」という問題はC・2に該当する。そしてこの勉強会で出されたのは、「島原の乱についてC問題をグループごとにつくる」という課題だった。生徒がさまざまな意見を出して悪戦苦闘するのと同様に、グループ内で時間をかけた話し合いが続いた。「主体的・対話的で深い学び」のためには、モヤ感(それがなぜなのか疑問をもち、解決できずにモヤモヤした感情)をいだき、物事に対してクリティカルシンキングをお

こない、考えるときに自分軸をもつことが必要だと石川氏はいう。単純な知識の暗記力を問うのではなく、知識を「自分ごと」として活用するような問いを設定することの重要性を、この勉強会で認識した。

二 実践授業例

KP法を用い、教員のやるべきことから「引き算」し、グループワークで生徒の自主性を引き出すよう試みた授業の事例を二つ紹介する(五〇分授業)。すなわち前章の(一)～(三)を盛り込んだ実践授業例だが、(四)の石川氏が指摘するような問いの質は深く考えていない段階での事例である。

(一) 諸子百家(二〇一六年二月実施)¹⁰⁾

【説明】五分

まずこの日のテーマ「春秋・戦国時代の社会変化は何か」を提示し、生徒に次のような授業の流れと、作業・考察をおこなう内容を、KP法で説明する(図2)。

①教員から諸子百家の概要を解説する。

②それぞれグループでプリントの問い(ワークシート)について調べる。

③「あなたならどの諸子百家の思想を支持するか」の答えをグループごとで整理する。

変換操作	全体関係	変容 3	ザビエルがしたこととして正しい選択肢をすべて選び年代の古い順に並べなさい。	キリスト教の日本伝来は、当時の日本にどのような影響を及ぼしたのか、200字以内で説明しなさい。	もしあなたが、ザビエルのように知らない土地に行って、その土地の人々に何かを伝めようとする場合、どのようなことをしますか。600字以内で答えなさい。
複雑操作	カテゴライズ	複雑 2	ザビエルがしたこととして正しい選択肢をすべて選びなさい。	キリスト教を容認した大名を一人あげ、この大名が行ったこと、その目的を100字以内で説明しなさい。	もしあなたが、ザビエルだとしたら、布教のために何をしますか。具体的な根拠と共に400字以内で説明しなさい。
手順操作	単純関係	単純 1	(ザビエルの写真を見て)この人物の名前を答えなさい。	ザビエルが日本に来た目的は何ですか？50字以内で書きなさい。	もしあなたが、ザビエルの布教活動をサポートするとしたら、ザビエルに対してどのようなサポートをしますか。200字以内で説明しなさい。
(数) (言語)			A 知識・理解思考 知識・理解	B 論理的思考 応用・論理	C 創造的思考 批判・創造



図1 首都圏模試センターの「思考コード」(首都圏模試センター提供)

- ④ 儒家・法家・道家・墨家を選んだグループがそれぞれ発表する。
- ⑤ 振り返りシートにこの授業で得たものを各自文章で表現して提出する。
- なお、時間の制限もあるため、発表は七グループ中(一グループは四〜六人で構成)、四グループのみとした。
- 【解説】 八分
- 儒家・墨家・道家・法家の四つを取りあげ、それぞれの諸子百家の特徴を解説し、思想内容の違いが理解できるよう努めた。あまり解説に時間をかけないように資料集を利用し、KPシートの枚数を極力少くした。
- 【作業】 五分
- プリントの空欄を埋め、グループ内で協働してそれぞれの諸子百家の特徴を理解する。この際、グループ内で教え合いが生まれるように、消極的なグループには声がけし、学習活動を手伝った(小林氏の提示した方法よりも、少々生徒の学習活動に介入した)。
- 【考察】 一五分
- 本日のテーマを自分ごとととらえられるように、「当時自分たちが生きていたら、どの諸子百家の思想を支持するか」について話し合うようにし、発表の準備をする。



図2 授業「諸子百家」のKPシート

【発表】一〇分

四グループであるため、一グループ二分で発表する。残り二分は交代や準備に利用する。聴いているグループは、ほかのグループの発表をメモするように促す。

【振り返り】七分

この授業で考えたこと、新しい発見などを、六〇字で文章に表現させる（振り返りシートは回収し、次の授業でもなものを印刷して生徒に配付した）。

互いにわからない用語があれば調べ、説明し合うようにする。

②教員の解説を聴き、プリントの空欄を補充する。必要なことは、空欄以外のこともメモするように促す。

③「白と黒の三角貿易」の白と黒とは何かを考える。また、この日のテーマ「黒人奴隷貿易がもたらしたものは何か」の答えを、グループごとで整理する。

④各グループの代表者が、黒板に自分たちの答えを板書し、教室全体で共有する。

⑤振り返りシートに、この授業で得たものを各自文章で表現して提出する。

【解説】七分

地図を確認しながら、ヨーロッパ諸国がどの地域に進出したのか概観する。第二次英仏百年戦争について、とくにフレンチ・インディアン戦争にふれ、パリ条約でイギリスがフランスやスペインから領土を奪ったことを確認する。フランスはスペインにミシシッピ川以西のルイジアナを譲渡したため、北米植民地をすべて失ったことにも言及し、最終的にイギリスが勝利したことも強調する。また、一七世紀にヨーロッパ・アメリカ・アメリカ大陸を結ぶ三角貿易がさかんとなり、その一環として黒人奴隷がアフリカからアメリカ大陸に送られる貿易が活

(二) 黒人奴隷貿易 (二〇一六年九月実施)

【説明】五分

この日のテーマ「黒人奴隷貿易がもたらしたものは何か」を提示し、生徒に次のような授業の流れと、作業・考察をおこなう内容を、KP法で説明する(図3)。前の授業時間に、あらかじめ四人グループをつくっておくように指示しておいた。

①一グループを二つに分け、教科書の読み合わせをおこなう。

発化したことを簡単に解説する。

【作業】三分

プリントの空欄を埋めることで、説明した内容を把握する。

【考察】一五分

本日のテーマは「黒人奴隷貿易がもたらしたものは何か」で

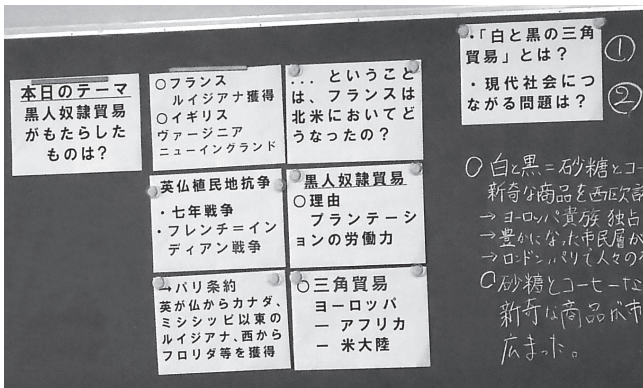


図3 授業「黒人奴隷貿易」のKPシート

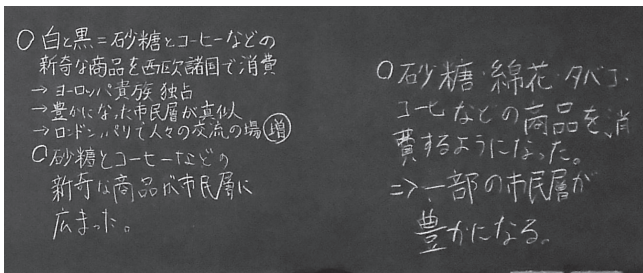


図4 各グループの生徒代表者による板書発表

ある。これに関する問い「白と黒の三角貿易」とは何かを考え た後、黒人奴隷貿易が現代社会にもたらした影響をグループ内 で出し合い、グループとしての答えを整理する。

【発表】八分

黒板に各グループの代表者が自分たちの意見を書き、情報を

全体で共有する(図4)。

【解答・解説】五分

解答・解説プリントを配付し、内容を確認しながら、不十分なところを付け足す。わからないところがあれば、グループ内で教え合うようにする。

【振り返り】七分

この授業で考えたこと、新しい発見などを、六〇字で文章に表現する(振り返りシートは回収し、次の授業でおもなものを印刷して生徒に配付した)。

三 授業の目的

まず、授業手法について述べる。生徒が授業中に頭を働かせる時間をいかに創出するかが大切である。そうした時間を創出するため、板書をなくすこと、授業中の説明の流れがわかることが重要であると考 え、KP法による授業を始めた⁽¹⁾。後述するように、

当初は生徒に戸惑いがみられたが、現在ではこの方法が受け入れられている。また、本稿で提示したグループワークや、通常の授業で多用しているペアワークの方が、一人一人で考える授業よりも集中して楽しく学習できるという（生徒の振り返りシートに書かれている感想・意見に多い）。文部科学省が公示した「対話的な」学びにも、グループワークは適している。ただし、たんなる雑談にならないように、教員はうまく生徒の学習が「学び合い」になるようにファシリテートしなければいけない。

さて、この二つの授業の目的は三つである。第一に、知識をつけ、対話によってそれを活用することである。儒家の孔子が内面的な仁や外面的な礼を説いたこと、墨家が無差別な愛の重要性を説いたこと、秦の始皇帝が法家の思想を採用して焚書・坑儒を実施したことなどは、諸子百家を説明するうえで不可欠であろう。しかし、その知識を自分たちが物事を考える材料とし、当時の社会状況を考察するという「活用」があつてこそ、深い学びにつながるのではなからうか。黒人奴隷貿易については、黒人がアフリカ西岸からアメリカ大陸に運ばれ、その労働力を利用して、サトウキビ・たばこ・綿花・コーヒーなどがヨーロッパにもたらされたことを暗記するだけでなく、そのことが当時の社会に何をもたらしたのかを考えることこそ重要なもの

である。

第二に、学習した内容をたんなる歴史的事項としてではなく、自分ごととして考えることである。自分が春秋・戦国時代に生きていたなら、どのような理由でどの諸子百家の思想を支持したかを想像することで、古代の思想や社会状況を自分ごととして考えることができる。また、黒人奴隷貿易が現代社会にもたらした影響を考えると、現在ニュースや新聞で取り上げられている時事問題につなげて考察することができる。近代のできごとが今につながっていることを実感し、黒人差別があつてはならないと考えるとき、その思考は自分ごとにとどまらず、社会問題を考えるきっかけにもなるだろう。

第三に、自分とは違う考え方を知り、それを自分の意見と比較することである。儒家を支持すると答えた生徒が、「儒家の思想は理想であるが、当時の戦国時代のような乱世にあつては受け入れがたいかもしれない」と振り返りの作文で書いている。また法家を支持すると答えた生徒は、「法律や罰則でがんじがらめにした世の中は生きにくく、儒家や墨家のような心の温かさを求めたかもしれない」と書いている。このように仲間の意見を参考にして、春秋・戦国時代の社会を生きた人々の心情を考える授業は、従来の授業に比べて深い学びになったと思われる。また、白と黒の三角貿易の問いについて、白は白人を、黒

継続してほしいこと	2015	2016	2017
ペアワークやグループワーク	○	○	○
体験談を含めた雑学	○	○	○
KP法による説明		○	○
わかりやすい説明	○	○	
自分で考える授業		○	○
写真や地図の利用	○		
教え合いによる学習			○

改善してほしいこと	2015	2016	2017
豆知識（雑学）をもっと盛り込む	○	○	○
ペアワークやグループワークをなくす（減らす）	○	○	
板書とノートの講義形式に戻す	○	○	
考察部分の答えを明確に教える	○	○	
プリントに書き込むスペース（メモ欄）を作る	○		
プリントの空欄を多くする	○		

図5 授業アンケートによる生徒の要望

は黒人を指すと板書したグループもあった。そのグループの生徒には、「白人が黒人を利用して自分たちの貿易をコントロールすることによって利益を上げ、結果として黒人より白人が優位な社会をつくりだした」と書いていた者もいた。従来使われている意味とは違うかもしれないが、その考え方を次の授業で紹介したとき、生徒たちに納得した表情がみられた。このことは、正

解以外の答えからも学ばべきであるということを示唆している。以上のような授業は、まだ授業デザインや手法に改善すべき点があるだろうが、「深い学び」へのスタートとしては悪くないと思われる。

四 振り返りの意味とそこから得るもの

振り返り（リフレクション）とは、授業から一旦離れてその日おこなったことを客観的に省みることである。授業に臨んだ自分や授業そのものをみつめなおすことで、その後の授業により効果的に取り組むための「知」を見出すのが目的である。筆者は授業の最後に毎回一定の時間をもって「振り返り」をおこなっている。それは、その授業での「気づき」を認識し、生徒が何を理解できたのかを確認するためである。そして他者との違いや得たものを整理し、文章表現力をつけるため、短い文章を書かせている。こうした振り返りには皆川氏が指摘したように、生徒がどんな感想をもち、どのような要望をもっているのかを教員側が知るといふメリットもある。生徒に授業の失敗を次回の授業に活かすよう求めるなら、教員も主体的な学習者になり、生徒の要望を参考にして授業を改善するよう努力しなければならぬ。

筆者が実施しているアンケートをみてみよう（図5、自由記

述形式のため白紙も多く、約一〇%以上の要望があったものに○をつけている。ここからわかることは、ペアワークやグループワークによる学習は生徒自身も効果的だと認めている反面、コミュニケーションが苦手な生徒は強く反対していることである。そうした生徒に対しては、後方に「一人席」を設け、一人学習したい者を募ってそこで学習するように促す。そして教員が関わりながら、さながら教員とペアワークするように進めるのである。そうすることで、徐々に他者との関わりに慣れていくと、やがてペアワークできる生徒も増えてくるようである。

そのほかの項目も、教員側の意図が徐々に浸透し、ワンウェイではない授業に慣れてきたためか、学年を追うごとに改善してほしいとする要望が減っている。また、歴史の授業は自分たちで考え、教え合う学習の学びがいを感じる生徒が増えていることがうかがえる。KP法による説明には、一年生の段階では反対する生徒が多く、従来の講義形式に戻してほしいという要望が多かったが、二年生以降になると歴史的な流れをコンパクトに説明したうえで、対話によって考察する方式が定着してきている。なお、体験談や雑学に興味を引かれる傾向が強く、考察時間を多く取るために「解答・解説プリント」に豆知識を盛り込んで配付している。このような授業分析は、振り返りシートやアンケートを通じて情報を獲得することで可能となり、教

員自身の授業の振り返りとしても非常に有用で得るものが多いといえよう。

五 今後の授業改善に向けて

二〇一六年二月に出された「答申」では、育成を目指す資質・能力の三つの柱を次のようにまとめている。¹²⁾

①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）。

②理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）。

③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）。

これは二〇一五年に出された「論点整理」に比べると、「何を知っているか」から「何を理解しているか」、「個別の知識・技能」から「生きて働く知識・技能」へと変化していることがわかる。そして「答申」では、ALに「深い学び」の視点を加えていることが最大の変更点である。¹³⁾

こうした「主体的・対話的で深い学び」に向け、石川氏が提唱するような問いの質を考えることは不可欠であろう。さきに取り上げた首都圏模試センターの「思考コード」C問題は、実

際にはないことを設定してそのことを問う「クリティカルシンキング」である。この種の問題はその場の思いっただけでは解けず、当時の人々や社会の動き、歴史的背景を知っていてこそ厚みのある答えが得られる。筆者はこうした問いの質を意識し、二〇一七年一〇月に「もし日清戦争を避けられるなら、あなたはどんなことをしますか」というテーマで、同治の中興から日清戦争までの清朝の動揺を扱う授業をおこなった。さまざまな意見をもとに生徒同士が主体的に対話し、一つではない答えを求めた学習活動が展開された。生徒にはまだ十分な歴史的知識はないかもしれないが、授業後に提出された振り返りシートでも、充実した授業だったことがうかがえた。

A L型授業をおこなうと、知識がないままとなってしまう、学力は低下するという意見が出されることがある。実際、知識を増やさないと情報処理能力が不足したままになってしまい、課題解決型学習と銘打っても多くの生徒が考えつくような安易な答えとなってしまう場合もあるだろう。しかし、「知識↓課題解決」ばかりを気にすると、なかなか課題解決型学習に移行しない。知識の取得と課題解決を並行しながら、授業展開を考える必要があると思われる。石川氏は、次のように述べている。⁽¹⁴⁾

私たちはまず「知識・技能」を定着させて、次に「思考力・判断力・表現力」を育てる。そうした準備をしてから

ようやく「主体性・多様性・協働性」を確実なものにするという直線的な手順をたどる教育をしがちです。これだと結局「知識・技能」の定着で終わってしまいます。

これからの社会では、知識をつけながら総合的に判断したり創造したりする力が必要になってくる。そしてさらに求められる能力は「創造的思考」であり、課題解決をするよりも高次な思考力を指す。自ら課題を見つけて設定し、さまざまな方面から解答を探っていく能力が求められ、私たちはそうした能力のある生徒を育てなければならぬだろう。知識を断片的に利用する仕事は、人工知能（AI）がおこなうようになる時代がそう遠くない時期に訪れることが予想される。しかし経験したことがない、すなわちC問題のような課題を解決するには、人間がもっている知能が不可欠になる。そのために私たち教員は授業デザインを設計することが必要であり、生徒が「主体的に深く学ぶ」問いを設定することが重要である。従来の教育のように暗記を重視して「知識」をたくさんもっている生徒ではなく、「知識」を活用して柔軟に社会の課題にこたえられるような生徒が、私たちが育てるべき人間だと思われる。そうした観点から、世界史という科目にとらわれるのではなく、場合によっては「総合学習」という枠組を利用しながら、博物館を活用して「主体的に深く学ぶ」場を提供することも、今後考えていかな

評価ポイント	時間配分	K Pシート	姿勢・視線	話し方	内 容
評 価	A	B	B	C	B
理 由	時間内に終わった。時間配分が良い。	色をつけてもっと強調すればよかった。	メモをあまりみず、聴き手をみながら話していた。	話し方が速く、内容が伝わりにくかった。	論点が明確で、問題点が明らかになった。
コメント アドバイス	発表の基本はしっかりできていた。聴き手をみて話そうとしていた点は良かったが、ゆっくり話してわかりやすく表現すると、さらに良くなると思う。				

図 6 プレゼンテーション評価用ルーブリックの記入例

ければならないだろう。
また、生徒の学習活動をどのように評価するかも、今後の大きな課題となる。筆者が実施している定期考査では「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」の三つの観点別に問題を作成し、返却する答案にそれぞれの得点を明示して生徒自身にどの力をつけるべきかを考えるよう求めている。二〇一六―一七年度では、広島市の平和学習（校外研修）の振り返り授業として、生徒たちのプレゼンテーションを生徒どうしで評価する際、ルーブリ

ックを用いている（図 6）。これを改善して通常の授業で使えるよう、現在検討中である。

おわりに

「答申」には「何のために、どのような改善をしようとしているのかを教員間で共有しながら、学校組織全体としての指導力の向上を図っていけるようにすることが重要である」と記されている。しかし、筆者が勤務する私立学校は人事異動が少なく、他校からの情報が乏しいのが実情である。個別の学校にとどまらず、他校との連携、場合によっては都道府県や地方の枠をこえた全国的な情報の共有が必要となっていくだろう。本稿で扱った四人の事例は、宮城県という枠内ではなく、ほかの都道府県で教育活動をおこなっている方たちに直接会って話を聴き、あるいは授業を体験して得た貴重な機会であった。本稿が、今後の社会に必要な生徒の資質・能力を育成するため、同じ目標をもった仲間同士が授業改善に向けて議論する契機になれば幸いである。

謝辞

皆川雅樹（前専修大学附属高等学校）・下町壽男（前花巻北高等学校校長）・小林昭文（産業能率大学）・石川一郎（香里ヌヴェール学院長）各氏には、

本稿で紹介したように、授業改善に向けて大きな影響を与えていただいた。また、皆川雅樹・及川俊浩（聖ドミニコ学院高等学校）・杉山比呂之（専修大学附属高等学校）各氏が連続寄稿されたA1しに関する「教室レポート」『歴史と地理——日本史の研究』二五四～二五六号により、本稿の執筆意欲が触発された。ここに氏名を載せられなかった仲間も含め、記して感謝申し上げます。

▼注

- (1) 文部科学大臣下村博文「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（二〇一四年一月二〇日）
- (2) 文部科学省「高等学校学習指導要領」（二〇一八年三月三十一日公示）
- (3) 宮城県高等学校社会科教育研究会歴史部会における講演（於仙台工業高等学校、二〇一五年九月二十五日実施）
- (4) 多々良穰「考える時間を創り出すK P法による世界史授業」（川嶋直・皆川雅樹編著『アクティブラーニングに導くK P法実践——教室で活用できる紙芝居プレゼンテーション法』（みくに出版、二〇一六）一三四～一三九頁
- (5) 宮城県大和町指導力向上研修会における講演（於大和町まほろばホール、二〇一六年八月二二日実施）
- (6) 産業能率大学アクティブラーニングセミナー（於仙台市生涯学習支援センター、二〇一六年九月二四日実施）
- (7) 小林昭文『アクティブラーニング入門』（産業能率大学出版部、二〇一五）、小林昭文『アクティブラーニング入門二』（産業能率大学出版

部、二〇一七）

- (8) 石川一郎を囲む会（於仙台市青葉区中央市民センター、二〇一七年七月八日実施）

- (9) 石川一郎『二〇二〇年からの教師問題』（ベストセラーズ、二〇一七）

- (10) この授業は、皆川氏以外の三人の講演を聴く前にすでに実施していた。

- (11) 筆者が健康上の理由で板書が困難になり、板書なしに効果的な説明ができるK P法を試したことが、このような授業を始めるきっかけとなった。

- (12) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（二〇一六年十二月二一日）

- (13) 奈須正裕『資質・能力と学びのメカニズム』（東洋館出版社、二〇一七）

- (14) 注9参照

- (15) 多々良穰「高校教員から見た「博学連携」のあり方」（『金沢大学考古学紀要』三九（金沢大学人文学類考古学研究室、二〇一八）六七～七九頁

（たたら ゆたか／東北学院榴ヶ岡高等学校教諭）